中京大学体育学論叢　37-1,57-64　1995

韓国スポーツ社会学の研究動向と課題

安　永弼*，安　昌圭**，徐　相玉**

A Study on Research Subjects and Trends in Korean Sociology of Sport

Young-Pil AHN, Chang-Kyu AHN and Sang-Ok SEO

Abstract

This study reviewed and evaluated trends and outcomes in research in Korean sociology of sport. In particular, the authors felt it is necessary to conduct research in developmental subjects to cultivate a more substantial qualitative approach to this field.

Results were as follows :

1) Research in the develpoment of Korean sociology of sport requires a variety of paradigms having the capacity to create distinctive concepts and theories.

2) There is a need to carry out basic research and applied study in Korean sociology of sport through the acquirement of both international knowledge and knowledge specific to Korea on the subject and to strive for various social advances in specialties in the field.

3) Although research on Korean sociology of sport that fits the natural features of korea is necessary immediately, a critical introduction on how America has influenced this field cannot be forgotten.

I　研究の必要性と目的

スポーツの社会的現象は，人類の起源から始まったといえる。これに対する研究が学問として発展しはじめたのは，近代スポーツが制度化され社会制度として定着しはじめた近代においてである。しかし，スポーツの社会的現象を学問として研究しようとする努力は，世界的には大陸別，または国別にその発展の歴史・過程を異にしている[1)]。

韓国の場合，スポーツの母体である身体活動，遊び，ゲームなどは歴史とともに始まったともいえるが，近代スポーツが導入されたのは1900年代の初めである。スポーツの研究は1953年韓国体育学会が創立され，公式学術誌として出版された1955年の韓国体育学会誌の刊行をもってその開始が認められる。

スポーツ社会学の総合的研究は1960年代末頃，一部大学で体育及びスポーツ社会学の講義が開設されるようになってから体系化された。さらに，1991年には韓国体育学会の一分科会として韓国スポーツ社会学会が結成され，韓国で

*韓国東亜大学校体育大学（1994年度中京大学体育学部客員研究員），**大学院生

のスポーツ社会学はスポーツ科学の下位学問としてその位相を定立するようになった。

本研究の目的は，創立3周年を迎える韓国スポーツ社会学会の研究方向を眺望し，その成果を評価することにより，より高い質的飛躍のための発展的課題を導き出すことにある。さらに，これらの諸問題を明らかにするために，次のような研究課題を中心に展開していきたい。まず，韓国スポーツ社会学の成立過程に関する内容を，成立過程と現在の位置について明らかにする。つぎに，韓国スポーツ社会学の学問的要件としての研究領域，理論・研究方法について分析，考察する。さらに，韓国スポーツ社会学の展望を行うこととした。

II 韓国スポーツ社会学の成立過程と現在の位置

1 スポーツ社会学の成立と発展段階

スポーツ社会学研究の歴史は，古いものではない。H. Risse の“Soziologie des Sports”が1921年に出版されたが，1953年 Frederick Cozens の“Sports American Life”という著書が出版されるまで30余年にわたり，重要な出版物は刊行されていなかった。それ故，スポーツに関する社会学的な研究は多くの関心を集めることができなかった[2)3)]。

スポーツ社会学における本格的な研究が開始されはじめたのは，1964年 ICSPE（International Council of Sport and Physical Education）にスポーツ社会学委員会の設置がみられた頃からである[4)5)]。さらに，S. K. Figler[6)] は，Kenyon and Loy（1965）の論文“Toward A Sociology Of Sport”が出版されることによって，スポーツ社会学が社会学と体育学の領域から完全に独立したわけではないが，教師養成訓練の分野で関連学問として受け入れられるようになったと主張している。

このように，スポーツ社会学という名称が1921年に，はじめて使われたが，40余年の間，注目を浴びる研究がみられなかった。すなわち，スポーツと関連する諸現象に対する描写的な研究にとどまり，1965年に“Toward A Sociology Of Sport”が発表され，その学問的な位置を確立した[7)]といえる。

スポーツ社会学が学問として発展する過程を最も説得的な形で提示したの[8)]は，Loy（1978）が示した学問の発展を4段階に区分し，スポーツ社会学に適用した方法である。この分類によると，学問は特定現象に関心を持つ学者らが相互交流を持たず個人的に研究する初期の段階を normal stage，同じ分野に関心を持っていた学者らが集まって公式的な交流を持つ段階を network stage，交流を持ち続けていく状態で理論的，研究方法的，または研究領域の側面から地域別，学校別に共通関心集団を形成していく段階を cluster stage，そして共通関心集団が深化されより独自性を高め，学問的に成熟していく段階を speciality stage というふうに漸進的な発展を遂げていく。

欧米の場合，1964年に国際スポーツ社会学会（ICSS）を結成して世界中の学者が公式的に学問の交流を行いはじめて以来，共通関心集団とスポーツ社会学全体における学問の権威が認められ成熟した speciality stage に進入しているといえるであろう。韓国の場合[9)]，欧米の状況と比べてスポーツ社会学の発展段階を区分してみると，韓国スポーツ社会学会の結成を契機に関連学者が公式的に交流しはじめ，スポーツ社会学会の支部が結成された1994年または1995年までを network stage とすることができる。現在，韓国スポーツ社会学の発展段階は，cluster stage に入ったとみることができる。

2 韓国スポーツ社会学における現在の位置

現在，スポーツ社会学は欧米を中心として発展しつつあり，speciality stage に向かって学問の権威を高めるために努力を傾けている[10)]。まず，スポーツ社会学はスポーツ科学を専攻している学生はもちろん社会学，教育学，経済学，文化人類学，新聞放送学を専攻している学生に共通に提供されており，スポーツ社会学者の半数以上はスポーツ学問以外の学問の背景を持つ人々で占められている。

つぎに，スポーツ社会学の研究成果はスポー

ツ科学関連学術誌のほか社会学，文化人類学，教育学などの学問分野の権威ある学術誌に掲載されている。また，スポーツ社会学はスポーツ科学の4つの基礎科学(スポーツ生理学，スポーツ力学，スポーツ心理学，スポーツ社会学）の一つとして定着し，学部の専攻学生(体育教育，健康教育，余暇レクリエーションなど)にスポーツの基礎知識として提供されているばかりではなく，スポーツ科学以外にも社会学科の関係から社会学の36の下位分科の中で学問成熟度28位に位置づけられており，世界及び地域社会の社会学の学術大会に一つの分科として活躍している。

韓国の場合[11]，スポーツ社会学がスポーツ科学の4つの基礎科学の一つの下位学問として地位を固めているが，スポーツ科学全体が欧米のような学問的水準を維持しておらず，また他の学問との交流も活発ではない。しかしながら，1992年から社会学会の学術大会に参加しスポーツ社会学の高い水準を見せており，ソウル大学の行政大学院の教授達はスポーツ社会学の教材を翻訳するなどの関心を見せている。韓国スポーツ社会学は関連分野の著名人を招き，スポーツ社会学と社会学，文化人類学，犯罪学，教育学及び女性学との関係を討議する過程の中でスポーツ社会学が他の学問に比べて劣っていないことを主張している。韓国のスポーツ社会学会は創立してわずか3年ばかりであるが，国際スポーツ社会学会の会員数は100余名に達しており，国際スポーツ社会学会における会員数としては1，2位であり，国際スポーツ学会副会長国として世界のスポーツ社会学情報を伝達する英文ニュースレータを定期的に刊行している。

III　韓国スポーツ社会学の学問的要件

一つの研究分野が体系を備えた学問として認められるためにはその学問のみの固有な研究領域，概念と理論及び研究方法を持つべきである。スポーツ社会学が発展するかどうかは，この学問要件で固有性をいかに維持し，成熟させるかに左右される[12]といわれている。

まず，スポーツ社会学の研究領域は，母科学（mother discipline）として社会学の模倣の水準を脱し，集団，組織，制度，社会問題はもちろん国家とスポーツ関係領域でその独自性を確保している。しかし，研究の概念及び理論，研究方法では成熟した学問としての地位を獲得することができない状態にある。スポーツ社会学で用いている大部分の概念と理論及び研究方法は関連母科学の学問からのものにとどまっている。

従って，本章では，スポーツ社会学の学問的要件を一つ一つ把握し，スポーツの社会的現象の研究の独自性確保への可能性を明らかにするとともに，韓国スポーツ社会学の実態を紹介する。

1　スポーツ社会学の研究領域

スポーツ社会学は総合社会学の研究主題と密接な関係を持つ。特に，スポーツ社会学は一般社会学の理論と方法を援用して研究されているために，社会学の関心と観点を創造的に発展せざるを得ない[13]。既存の研究主題を分析してみると，多様な領域を取り扱っていることを発見することができる。これを共通分母として扱い難いが，何人かの学者の見解を紹介すると次のようである。

Eitzen & Sage[14]（1982）は，スポーツ社会学の研究領域を社会心理学的（social-psychological），微視的（micro-perspective domain），巨視的(macro-perspective domain）領域と区分している。彼らは，スポーツ社会学は社会組織よりも人間行動に大きな関心を持つという側面で，ある社会環境下での人間の行動パターンを明らかにするという意味で社会心理学的領域を説明している。微視的領域は，組織の目標と目的の達成に関連している。巨視的領域は，社会規範，価値，社会的地位と役割，社会制度に関連している。

Spritzer[15]（1974）は，社会制度としてのスポーツの特性，スポーツの構造と機能を政治，経済，宗教，学校，社会問題との関連から扱っている。すなわち，社会階層，社会移動，人種

問題，性とスポーツの関連を社会的成層の側面から問題にしている。さらに，社会化，パーソナリティ，態度，価値との関連を社会心理学的側面から問題にしている。

Coakley[16](1986)は，スポーツ社会学の領域を社会生活との関係，多様なスポーツ場面の中での社会組織及び社会的相互作用との関係，スポーツ経験に影響を及ぼす文化的・構造的・状況的要素との関係，及び，スポーツと関わって生ずる社会過程との関係に区分している。しかし，Loy[17](1993)は，スポーツ社会学の研究分野を合法化(legitimation)，民主化(democratization)，合理化(rationalization)，世界化(globalization)と区分し，説明している。島崎　仁[18](1972)は，体育社会学とスポーツ社会学の関係及び研究領域を比較説明しながら，スポーツ社会学は，パーソナリティ体系，集団体系，文化体系，社会変動との関連及び下位体系の間に起こる問題を研究する学問と位置づけ，労働としてのスポーツ，余暇としてのスポーツ，教育としてのスポーツの観点から説明している。

一方，スポーツ社会学の概論書を中心に研究領域を分析してみると，北米の場合には，スポーツ論，研究方法論，集団，組織，下位文化，社会化，教育，逸脱，政治，経済，大衆媒体，法，宗教，集合行動，社会階層，性，人種，年齢，社会変動，地理などに区分される。概論書で最も多く構成されている領域は，スポーツ論，経済，下位文化，政治，人種，社会化，性，社会変動，研究方法，教育，社会階層，逸脱，大衆媒体，宗教である。韓国の場合には，社会化，下位文化，集団，政治，スポーツ論の順に関心がみられ，あまり取り扱われていない領域としては社会変動，組織，宗教，方法論，マスコミの順である[19]（表1参照）。

以上，スポーツ社会学の学問的要件を研究領域と関連させてみてきたが，いくつかの疑問が提起される。これに対して，金　凡植[20](1994)は，次の4点を述べている。①産業社会がもたらした結果として公害，家族やコミュニティの解体現象，社会病理現象，社会政治的緊張，暴力，労使間の葛藤などの具体的な現実問題に対応することができないという理由で，スポーツ社会学は学問的偏食性向を帯びている。②スポーツ社会学の強い保守性と現実への有用性のない学問性から脱するためには，応用分野の拡大が必要である。③スポーツ社会学の統合科学としての役割を果たす。④スポーツの純機能的側面や体制志向的な領域から脱して，自由主義的で改革主義的な側面を重視せざるを得ない。

スポーツ社会学は短い歴史にも関わらず，量的，質的に大きく成長し，研究領域は多くの学者の見解と地理的，社会的状況によって多様に取り扱われていることがわかる。このように，スポーツ社会学は研究領域と関連して応用分野への拡大，社会諸問題の解決に対する貢献は勿論のことであり，ひいては，実用的で，実践的で，開放的で，そして，独自性を追求する方向に進めていくべきである。

2　韓国スポーツ社会学の理論と問題点

韓国スポーツ社会学会の成果を評価する上で最も核心的な要素は理論的評価作業であろう。

表1　韓国のスポーツ社会学研究領域分類

領　域	編　数	%	領　域	編　数	%
スポーツ論	20	9.1	政治	26	11.8
方法論	10	4.5	経済	16	7.3
集団	30	13.6	マスコミ	10	4.5
組織	4	1.8	宗教	4	1.8
下位文化	31	14.1	逸脱	14	6.4
社会化	66	30.0	社会階層	14	5.9
教育	15	6.8	社会変動	1	0.5

（金　凡植[13]，1993，p. 20より）

1960年代中頃，スポーツ社会学が体育学の一分科として始まった際，自然科学研究のモデルを受け入れ，その結果としてスポーツ社会学は構造機能主義の影響を受けた[21]。これは，Loy & Kenyon[22]（1965）の論文で主張しているところの価値中立研究であり，スポーツ社会学の一時代の理論的傾向でもあった。価値中立の概念は，スポーツ社会学の目的が実験データからスポーツに対する知識を派生するものとして，知識の客観性は偏見から免れざるを得ないという前提に基づく。彼ら[23]は，科学的で，客観的なアプローチと価値志向的で，非規範的なアプローチとを比較しながら，スポーツ社会学を数量的な方法を通じて原因と結果関係を明らかにすることに研究の本質を置くことを強調している。

価値中立の概念，即ち，構造機能主義は，70年代のMelnick[24]（1975），Gruneau[25]（1978）とIngham[26]（1979）による対眼的理論のアプローチと歴史的方法論への提案，80年代のTheberge[27]（1981）とHall[28][29]（1978，1988）によるペミニズム的アプローチ，Hollands[30]（1984）とWhitson[31]（1984）による文化理論的アプローチ，Spretzer & Snyder[32]（1980）による象徴的相互作用論，Harris[33]（1983）による解釈的パラダイム（paradigm）などに影響を与えた。このような影響は，1970年代中ば以降，進歩主義者，象徴的相互作用論者，ペミニスト，社会批評家等によって主導され，スポーツの知識は歴史的に決定され，文化的内容を持ち，意味と相互作用は分離することができないという主張を共有している。

以上でわかるように，1960年代中頃，構造機能主義から始まったスポーツ社会学は，1970年代中ば以降，対眼的パラダイムへの挑戦を受けるようになり，葛藤理論，象徴的相互作用論などを経て，文化理論，ヘゲモニー理論，ペミニズムなどによる多様なパラダイムを持つようになる。

Coackley[34]（1987）は，北米のスポーツ社会学の論文を中心にその理論と方法論の分析を試みた。彼は，1984年から1987年までのSSJ（Sociology of Sport Journal）に掲載された95編にのぼる論文を分析した結果，研究論文の22%が理論中心であったとしている。同じ方法で1988-1992年の間のSSJを分析した結果，129編の論文から理論中心は40%に至る事実を指摘している。これらの比較を通じて，2倍に近い理論研究の増加があったことが立証されたのである。

以上，スポーツ社会学の理論的価値を取り上げたが，韓国のスポーツ社会学に焦点を絞ってみると，理論の欠乏と理論的偏向を提示することができる[35]。

スポーツ社会学の主な関心は，スポーツを社会現象の中で扱うために，社会理論を用いることが長い間主張されてきた[36]。スポーツ社会学の本質は社会学的であるために，社会学的方法と理論に基づいているが，スポーツ社会学の主なジレンマの一つは理論の不足にある。このような社会学の理論的欠乏の現状は，韓国のスポーツ社会学の研究においても同様である。韓国での研究論文は社会学理論の適用に不忠実なものとして判断される。学問的な歴史が短い韓国スポーツ社会学の実状としては当然なこととして認められるが，社会学の理論に忠実であろうとする跡はあまり見られないのである。即ち，わずかの研究論文が社会学の理論的な背景を持っており，より深刻なことはこのような理論の不在の現状に対する公式的な問題提起と解決のための方策に対して陥口しているという点である。スポーツ社会学が韓国で学問的正当性が認められ，質的成熟を遂げるためには，社会学の理論を踏まえた研究がなされなければならない大きな課題として認識される。

一方，外国の場合は，1970年代中ば，構造機能主義の対案として葛藤論が登場して，多様な理論が適用されており，現時点では構造機能論の放棄論まで提起されている実状である。韓国の場合，構造機能論はすべての部分を支配する理論になってきたが，機能論の限界を指摘する多くの学者は研究の構想段階で理論的・方法論的偏見から免れることを要求している。

構造機能論パラダイムから免れざるを得ないもう一つの理由は，韓国の社会構造と関連づけ

て説明することができ，韓国の社会学研究で採択されてきた理論をみればわかる。韓国の社会学自体が米国を頂点とする戦後資本主義体制の繁栄と安定に対する楽観的な展望をその根においている。50年代から70年代にわたって構造機能主義が支配的なパラダイムであった。80年代以後，韓国的社会学を主唱する一部社会学者による論争[37]は急激な変化を繰り返し韓国社会の枠組として米国的機能論の懐疑から始まり，新たな社会学の枠組を形成している[38]。

すでに，1970年代後半から韓国社会学で退色している機能論を用いてスポーツを研究することはスポーツが社会制度の一部であることを否定し，スポーツと社会構造を個別化させる結果をもたらすといえる。従って，1990年代中ばの時点で韓国社会を分析する最も有効な社会理論を探求し，スポーツ研究が進められることが大切である。

3 韓国スポーツ社会学における研究方法

本節では，科学としてスポーツ社会学がもっている学問的位相と関連してスポーツ社会学研究で利用されている資料の源泉及び研究方法上の論争とその対案を取り上げ，スポーツ社会学の分野で提起されている方法論的問題を指摘することによって，韓国スポーツ社会学研究の望ましい方向模索のための手がかりを模索しようとするものである。

スポーツの社会的現状を研究する方法には，観察，記述，分類，証明，帰納，一般化，比較，模型形成，仮説形成と検証などがあり，これらのすべてはスポーツ－社会関係に内在している多様な社会過程及び構造を理解するためのものである。このような方法論を中心に過去数十年間スポーツ社会学をも含めて一般社会科学の分野で続けられた論争は質的方法（qualitative method）と量的方法（quantitative method）との差異点にあった。

スポーツ社会学研究における質的研究方法は1960年代に始まり，1970年代に活発に開発された主観的・解釈的社会科学の研究方法の1つである。質的研究方法の背景は現象学的社会学，象徴的相互作用論，民俗方法論などに基づいており，民俗学的方法，事例研究，深層面接，参与観察，現場研究などがこれに属する。量的研究方法は研究しようとする対象の属性を可能な限り，量的に表現し，それらの関係を統計分析を通じて明らかにする形態主義の登場以後，急速な進前を見せており，無作為抽出法，多変量統計分析などの手段を背景にもっている。

これらの二つの方法論の技法は，各々独特な性質を持っているためにスポーツ社会学研究においてどちらかがより有用な方法であると規定することは難しい。質的方法の一つである参与観察は，スポーツと関連する深層的で多様な観察資料を提示することができる。反面，量的接近である社会調査は，一般化できる資料を得られる長所をもっている。しかし，多くの研究者は各々の研究方法がそれぞれ特定パラダイムと関連があると信じているために，どちらかの研究方法に傾くか執着することによって，結局，二つの方法の相互補完的結合を妨害している。スポーツ社会学の研究においても同様に，質的方法と量的方法との相互分離及び排他的適用はスポーツ－社会関係に対するより正確で，正しい理解を妨げるのみならず，客観的で科学的な問題解決を妨害する要因となるといえよう。

韓国スポーツ社会学も例外ではない。1980年代中ばを基点としてスポーツ科学内でそれなりの学問的領域を構築しているが，学問的体系と研究成果の側面ではまだ初歩的水準を免れていない[39]。このような現状は，すでに述べたように根本的には，独創的な理論体系の構築のための方法論が定立されていないことに由来する。スポーツ社会学がスポーツ科学分野の一学問領域として胎動してから25余年が経過したにもかかわらず，新たに開発された方法は提示されていない。今なお，社会科学や社会学での研究方法を活用している実情である。

以上述べたことから，今日の韓国スポーツ社会学が抱いている方法論的問題[40]は次の6つである。①研究のための概念的・理論的枠組の明確な設定が必要である。即ち，この問題は，明確な概念的・理論的枠組みが提示されなけれ

ばならないにもかかわらず，この過程を無視することによって，論理的に体系的な研究結果は導き出すことができない。②仮説設定過程や仮説定立で原則を無視すべきではない。一部研究論文の場合，仮説検証に必要のない明白な定義を仮説として設定する間違いがある。③理論を効果的に裏づける概念定義を明らかにすること。即ち，結果的に研究の信頼度及び妥当性に直接的影響を及ぼす研究の質を低下させる原因を除去することが大切である。④サンプリング方法と標本抽出の原則，標本の大きさを正しく設定すること。これが確報されないと，資料の信頼性を低下させるのみならず，結果の一般化に多少無理を生ずる。⑤適切な統計分析を適用することによって，資料を効果的に利用すること。すなわち，統計分析方法に対する理解や知識の不足に因り，単純な記述統計や交差分析程度に満足する危険性に陥るべきではない。⑥研究方法の偏向性が見られたこと，即ち，韓国における大部分の研究は量的方法が中心であって，質的方法を適用した研究はほぼ皆無である。

伝統的に，スポーツ社会学の研究方法は社会の現実を把握するための理論と科学的な方法論を探求しようとする認識論的基盤の上で展開されてきた。理論化は主にスポーツの社会的現象をそのまま理解するための活動であり，方法論は非社会的パラダイムである自然科学の方法論と類似であるという認識論的過程に基づいている。従って，スポーツ社会学が独自の学問領域としての位置を固め，独創的で体系的な知識体系を構築するためには既存の方法論に対する幅広い理解とともに，スポーツ社会学の研究の目的と理解に適切な方法論を開発せざるを得ない。

IV 結　　語

以上みてきたように，短い歴史にも関わらず，韓国スポーツ社会学がnetwork stageからcluster stageへの過程にあるといえるのは，創立3周年で成し遂げた韓国スポーツ社会学会の快挙であるといえる。しかし，これまでの韓国スポーツ社会学分野では問題解決に必要な方法論を主に社会科学の学問領域から借用し，無批判的に受容することによって，独自の知識体系及び方法論的体系を定立することができなかったのが現実である。

したがって，韓国スポーツ社会学の飛躍的な発展と根本的な問題解決のために，次の3点を指摘せざるを得ない。

1．韓国スポーツ社会学の発展は多様なパラダイムの受容が必要である。すなわち，独自の概念と理論を創り出さなければならない。
2．国際的な知識の習得とともに，韓国固有の知識を活かし，基礎研究と応用研究を推進しスポーツ社会学者の多様な社会進出のための努力が必要である。
3．北米の概論書の無批判的な受容ではなく，韓国の風土に合う研究領域の開発が早急に望まれる。

参考文献

1）李　鐘栄. スポーツ社会学の発展と課題，韓国スポーツ社会学会学術大会：1-12，1993.
2）林　銖遠. スポーツ社会学の学問的体系と性格及び展望に関する研究，東亜大学校博士学位論文：19-27，1991.
3）Leonard, W. M. A Sociological Perspective of Sport : 19, Minnesota : Burgess Publishing Co., 1980.
4）菅原　礼. スポーツ社会学の基礎研究：29，不昧堂，1984.
5）前出2）
6）Figler, S. K. Sport and Play in American life : 14, CBS Collage Pbs., 1981.
7）前出2）
8）前出1）
9）前出1）
10）前出1）
11）前出1）
12）前出1）
13）金　凡植. スポーツ社会学の研究領域と

研究動向，韓国スポーツ社会学会学術大会：14-17，1993.
14) Eitzen, D. S. and G. H. Sage. Sociology of Amarican Sport, lowa : Wm. L. Brown Company Pbs., 1982.
15) Spreitzer, E. and R. Snyder. Reflections on the integration of sport sociology into the larger displine. Sociological Symposium 30 : 1-17, 1980.
16) Coakley, J. Sport in Society : Issues and Controversies : 8-10, SC : Times Mirror/Mosby Collage Pbs., 1986.
17) Loy, J. W. Sociology of Sport Workshop. Seoul Korea, 1994.
18) 島崎　仁．体育社会学とスポーツ社会学との関係，体育社会学の方法と課題：89-96，道和書院，1972.
19) 前出 13)
20) 前出 13)
21) AHN, Min-Seok. スポーツ社会学の理論と問題，韓国スポーツ社会学会学術大会：29，1993.
22) Loy, J. and J. Kenyon. Toward a Sociology of Sport. Journal of Health Physical Education, Recreation 36 : 24-25, 68-69, 1965.
23) 同上，pp. 24-25.
24) Melnick, M. A Critical look at Sociology of Sport. Quest 24 : 34-37, 1975.
25) Gruneau, R. Conflicting Standards and Problems of Personal action in the Sociology of Sport. Quest 30 : 80-89, 1978.
26) Ingham, A. Methodology in the Sociology Sport : From Symptoms of malaise to Weber for a cure. Quest 31 : 187-125, 1979.
27) Theberg, N. A feminist perspective of responces to sport violence : Media coverage of the 1987 World Junior Hockey Championship. Sociology of Sport Journal 6 (3) : 247-256, 1989.
28) Hall, A. Sport and Gender : A feminist perspective on the Sociology of Sport, CAHPER : Sociology of Sport Monograph Series, Ottawa : CAHPER, 1978.
29) Hall, A. The discourse of gender and Sport : From feminist to feminism. Sociology of Sport Journal 5 (4) : 330-340, 1988.
30) Hollands, R. The role of cultural studies and social criticism in the sociology study of sport. Quest 36 : 66-79, 1984.
31) Whitson, D. Sport and Hegemony : On the construction of the dominant culture. Sociology of Sport1 (1) : 64-78, 1984.
32) 前出 15)
33) Harris, J. C. Interpreting youth baseball : Player's understanding of attention, winning, and playing the game. Research Quarterly for Exercise and Sport 54 : 333-339, 1983.
34) Coakley, J. Sociology of Sport in the United States. International Review for the Sport Sociology 22 (1) : 63-77, 1987.
35) 前出 21)
36) 前出 18)
37) CHO, Hi-MIn et al. 80 年代の批判的社会学会理論の展開と民族・民衆社会学：韓国社会学会の批判的認識，ソウル．ナナム出版，1990.
38) 前出 16)
39) 朴　鎮敬．スポーツ社会学の研究方法と課題。韓国スポーツ社会学会学術大会：58-59，1993.
40) 同上，pp. 58-59.